

## 我が文学研究の道のり・素描

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2021-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21408">http://hdl.handle.net/10291/21408</a>

## 我が文学研究の道のり・素描

宮 越 勉

大学教員は研究と教育の両輪を持つとよく言われる。この小文では私の文学研究面を中心に回顧してみることにするが、私の場合は、三期に分けるのが分かり易い。

私の立教大学時代における卒業論文の研究対象作家は志賀直哉であった。が、当時の立教大学には志賀直哉に関心の深い教員はおらず、他大学の大学院に移るしかなく、結果的に、明治大学大学院での本多秋五先生との邂逅は幸運となった。修士論文、手書きで三六七枚のものは、本多先生に高く評価され、大変嬉しかった。

博士後期課程に進み、まずは修士論文を元に手直しした論文を次々と発表して行った。すべて全力投球、研究方法は自己流だが、先行研究を踏まえ、新見を出すこと、なるべく平易な文章で書くことに心がけた。私の場合、

岩波書店の『文学』誌上への論文掲載が文学研究の公的な始まりとなったことは望外の喜びであった。だが、明治大学大学院の日本文学専攻には院生主体の研究会があり『明治大学日本文学』という研究誌を刊行していて、二本目の論文はここに発表した。岩波書店からは今から見てもかなりの高額の原稿料を頂いたが、二本目はむろん自腹を切ったのものであった。今思うに研究論文の発表機関はどこであれ、要は内容の良し悪し、それに尽きると言える。この論文は今読み返してみても出来のいい論文だったという自負はある。それ以降、文学部文学科紀要の『文芸研究』に中山和子先生から論文を書いて発表するよう懇慫され、志賀研究を進めて行った。その当時の『文芸研究』は、枚数制限なし、資料費の名目で原

稿料も頂けるもので、貧学生の身には誠に有難かった。さらに、『一冊の講座・志賀直哉』という共著書の刊行に当たり原稿依頼を受け、割り振られた担当の論題は修論にはないもので、無我夢中で書下ろし稿を書いた。それ以降はこれまた修論にはない志賀直哉の影響圏として芥川龍之介の場合と初期横光利一の場合を『文芸研究』に書いたのであった。とりわけ横光の場合には、構想や論じる内容を数年に渡り温めてきたもので、発表以後、他者論文で引用される頻度も高く、自信を持てる論文だったと思っっている。ここ迄を私の文学研究の第一期とする。

第二期は、大学院に在籍する期限が切れての退学後の、神奈川県立の二校、一四年間の高校教員時代である。とりわけ最初の赴任校は、底辺校とか教育困難校と言われている所で、文学研究は頓挫した。偏差値偏重教育の歪みもろに現れた教育現場だった。が、今回顧してみて、ここでの苦勞の数々は明治大学の教員になってからその教育面で大いにプラスに働いたと思う。それは、大学や高校に限らず教育機関というものは、生徒や学生、院生が主役であって、一部の教員の為にあるのではなく、教員は学生さん達のよい面を引き出すことに傾注すべきで、入学させた以上卒業させるべく努力すべきだということ

である。二校目の赴任校は所謂中堅校と言われている所で、文学研究の時間も僅かながらとれるようになり、最初の志賀論の単著を上梓できた。志賀直哉研究の先達である町田栄先生が書かれた拙著への書評（『日本文学』、一九九二・一）はほぼ全面肯定、称揚と言えるもので、以後これに私はいかに励まされたことか。昨今、駄書評と呼ぶべきものを書く輩が多くいるが、それが今日の文学研究の衰退にも拍車をかけていると言いたい。また、この時期、東京書籍から高校国語教科書の編集委員を委嘱された。編集の仕事はともあれ、教科書指導書（教師用虎の巻）の執筆は貴重な体験となった。文学研究と国語教育は交差するものである。研究論文はその専門の研究者のごく一部にしか読まれないが、教科書指導書は学校現場の国語科教員に関してはよく読まれ参考にされるもので、裨益する面は大きい。一一編の教材研究の原稿を執筆したが、文学作品では精読に努めることの大切さを改めて認識し、一般には広汎に読まれない研究論文、学術論文の類いも、延いては社会に形を変えて還元され、役立つことになると思うようになったのである。

第三期は、私が明治大学文学部日本文学専攻の専任教員としてあった二三年間をいう。当時の新任教員の採用

のあり方は、所謂一本釣り人事であった。中山先生の後任候補者として私を推薦してくださったのは大野順一先生であったが、私は大学院生時代、大野先生の授業を一度も受講したことはなく、せいぜい年二回の大学院の新生歓迎会、修了生祝賀会を兼ねたコンパなどでお話しをしたことがあるだけだった。それ故、専任教員の話が大野先生からあった時は意外でもあったが、のちの大野先生のお話しによれば、大野先生と本多先生の関係は頗る良好で、中山先生を含めた日本文学専攻および文芸学専攻の教員の了承を得てのものだったという。さて、私のこの二三年間での文学研究方面をいえば、まずは、明治大学着任後から一〇年目で志賀論の単著二冊目を上梓できたことである。単著一冊目の続編に当たり、『暗夜行路』と有機的関連を持つと見られる諸短篇を九章から成る第一部で綿密に論じ、第二部で『暗夜行路』の作品世界を七章に渡って様々な視座から論じ、全体が交響し合うように構成したのである。『暗夜行路』は修論で曲りなりにも論じていて、何度読み直したことがか。なお、この著書は、その前年度に博論として、明治大学大学院文学研究科で合格となったものであった。主査は小川武敏先生、内部副査は原道生先生、外部副査は池内輝雄先

生であった。博士号は数年前から日本では一年間に一万五千人ほどが取得しているそうで、私は今や博士の学位は大学教員免許状のようなものと認識している。その後の依頼論文の執筆は別にしても、志賀研究にさらに幅と深みを持たせるため、『白樺』派の他作家作品の研究も必要と思い論文文化していた。そして二冊目上梓のあと一年目まで志賀論の単著三冊目を上梓できた。研究というものは際限のない底なし沼のようなものである。この著書の初出論文は主に『文芸研究』であり、まだ長文論文は許可されていたが、当然ながら原稿料はなく、査読があつてそれにパスしたものだ。本書の内容の要約は紙幅の関係上割愛するが、志賀研究に幅の広さと深みを持たせることができたという自信はある。文学研究者とは、所詮、後世に残るような小説などは書けない存在で、せめて志賀なら志賀という文豪のこれまでに指摘されていないその人物と文学についての諸点を実証的に提言し、後世に語り継ぐのがその使命だと思ふに至っている。定年退職後のこれからは、第四期、いわば玄冬期に入つたわけで、老いとの闘いもあり、どれだけの文学研究の成果を出せるかは未知数である。が、老いの一徹、広義での文学との関わりは続けていくつもりである。